3年生が宝塚市に取材し、記事を書きました

宝塚市の全面的な取材協力と、一部写真提供も受けました。
記事・レイアウトは産経新聞社の協力を得て作成しました。

雲雀新聞

令和5年(2023)
3|23[木]

雲雀丘学園中学校
〒665－0805
兵庫県宝塚市雲雀丘4－2－1
TEL：072－759－1300
FAX：072－755－4610

D組2枚目

持続可能な街めざし

宝塚市のトップ、山﨑晴恵市長に、雲雀丘学園中3年の取材班がインタビューした。山﨑市長は、宝塚市を「持続可能な街」にすることが目標だ、と話してくれた。「将来、『山崎市政があったから、今も宝塚市が存在している』と、市民に言ってもらえるような施策をすすめていきたい」という。（川野隼也、三木唯、諸井沢哉）

山﨑市政 子育て世代支える

「宝塚市に住む人を増やすためにしていることは何ですか」との質問に対し、山﨑市長は「近隣の市と人を取り合うのではなく、宝塚市に今住んでいる人に、長く住んでいただくための施策を進めていかなければならない」と答えた。

そのため、特に力を入れているのが子育て世代への取り組みだ。

例えば、子育て中の家庭向けに発信している「きらきら子育てLINE」は、産前産後の時期に合わせて、登録している人に、医師が監修したメッセージなどが送られる。安心して子どもを生み、育てていけるようにする取り組みだ。

また、新庁舎には「たからっ子総合相談センター『あのね』」も開設された。妊娠中から、子育て中の保護者や0～18歳の子どもがさまざまな問題に直面したときに、保健師や医師などから、教育に関する分野も含めて幅広い相談を受けることができる。

さらに山﨑市長は弁護士でもあるため、学校に関するさまざまな問題について、法的な観点から指導や助言を行う弁護士「スクールロイヤー」制度も新設し、3人の弁護士が力を貸している。

市長の仕事は大変だしいが、私たちの取材にもていねいに、温かく答えてくれた。取材をしていて、宝塚市の人のことを大切に思い、宝塚市民を誇りに思っていることも伝わってきた。私たちが宝塚市で暮らしたり、勉強したりしている中で、山﨑市長が、今日も宝塚市を「持続可能な街」にするために取り組み続けていることがよく分かった。

「宝塚市を持続可能な街にすることが目標」と取材に答える山﨑晴恵・宝塚市長（奥）

子どもや保護者 相談幅広く

私たち子どもの健康な暮らしは、いろいろな人に支えられている。例えば親や先生、近所の人などだ。宝塚市には、「子ども政策課」という担当課があり、子どもがすくすくと育つよう、いろいろな取り組みを行ってくれている。その子ども政策課の武藤智史課長やみなさんに取材した。

子ども政策課は、妊娠してからの母子の健康づくりや、障碍のある子どもへの支援、保育所の運営、虐待への早期対応など、子どもと保護者に関する施策の推進管理を行っている。

少子高齢化が問題となっている中で、政府は「異次元の少子化対策」を打ち出している。自治体から見て、政府に何をしてほしいのかを聞くと、武藤課長は「施策を行うにはお金が必要で、国の補助が必要だ」と述べた。

子ども政策課が最も力を入れているのは、2月に開設された新しい施設「たからっ子総合相談センター『あのね』」だ。専門の医師もいて、さまざまな相談を受け付けてくれる。どこに相談すればいいのか、わからないことが起こったときに、総合的に相談を聞いてくれる施設は、戸惑う保護者にとって大切だ。

また「あのね」開設以前から、宝塚市には「子どもの権利サポート委員会」という組織もあり、子ども自身の悩みや相談を聞いてくれる。

「あのね」開設

成人年齢が18歳に引き下げられたことにより、若者の間でどんなトラブルが起こっているのかも聞いた。20歳以下での消費生活トラブルの相談では、保健サービスや金融機関でのトラブルが多いという。消費生活センターに寄せられる相談については、脱毛や歯の治療、暗号資産の契約などに関する相談が増えたという。

「子ども政策課」という名前の担当課が宝塚市にあることで、私たち子どもは安心して暮らしたり、学校に通ったりすることができると思った。（佐藤美央、関谷篤、仁科陽菜乃、松本愛依、松田翔伍、村上悠和）

2月に開設された「たからっ子総合相談センター『あのね』」

宝塚歌劇・市制・手塚治虫記念館
宝塚 来年3つの「周年」

宝塚市のセールスポイントを、観光客や市民に伝えていくのが宝塚市観光企画課の仕事だ。私たち雲雀丘学園中3年の取材班は、観光企画課の杉山貴さんにインタビューした。杉山さんは「宝塚市のいいところや魅力を、どうすれば分かりやすく伝えられるか、毎日考えています」と話してくれた。

観光企画課は、その名の通り、宝塚で開催されるイベントを企画する部署である。宝塚市には世界的に有名な観光スポットや、老若男女問わず楽しむことができるイベントがある。新型コロナウイルスの感染拡大で観光客が減る中、観光客の増加を目指している。

杉山さんは「この業務についてから、自分が当たり前のように知っている観光地でも、観光客の人は知らない、というケースがあることを知った」と話す。そのため、「分かりやすさ」を特に重視している。

宝塚市の観光客は、遊園地「宝塚ファミリーランド」の閉園で一時は大きく減少したが、最近、また新名神高速道路の宝塚北サービスエリアなど新しい施設もでき、「ウィルキンソン タンサン」の発祥地であることも改めて注目されるなど、観光客の注目度が高まっている。

令和4年は、前年より17%も観光客数が増える見込みだという。また来年の令和6（2024）年、宝塚市にとって重要な「周年」が3つもやってくるため、より多くの観光客を呼び込む取り組みが求められる。

3つの周年は、宝塚歌劇110周年、宝塚市制70周年、手塚治虫記念館開館30周年だ。もっとたくさんの観光客が宝塚市を訪れ、盛り上がっていけばいいと思う。そしてその翌年には、大阪・関西万博も開催されるので、私たちも大いに注目していきたい。（倉石寛、澤村虎我、新谷珀斗、竹田采加、松本櫂）

楽しさあふれる手塚治虫記念館のエントランスホール

植物に興味を持って

日本三大植木産地の一つに数えられる宝塚市の山本地区に設けられた「あいあいパーク」で、私たち雲雀丘学園中3年の取材班は、パークに勤める西本健さんに取材した。西本さんは「植物の気持ちを理解して、育てている」と話してくれた。

あいあいパーク 企画工夫

あいあいパークは、ガーデニングが盛んな国イギリスをモチーフとしている。西本さんによると、最近はマンションなど庭のない住宅に住む人が多くなり、植物を育てにくい環境になっている。そうした状況の中で、多くの人に、植物へ興味を持ってもらおうと、西本さんやパークの人たちは、さまざまな努力をしているという。

例えば、最近人気を集めているハーブに関する講座を開き、若者にも関心を持ってもらおうとしている。ほかにも、一見植物と関係のないヨガの講座を、アロマと関連づけて開くことにより、植物へ注目してもらうねらいだ。

植物に関心をもってもらうことができれば、どうすれば長く美しさを保つことができるか、観葉植物をどう管理していくか、などについて植物の育て方の「プロ」が、ていねいに教えてくれる。

植物には水をあげなければならないことは、だれでも知っているが、西本さんによると、ただ規則的に水をあげると成長する、というわけでもないという。逆に、水をあげすぎると植物の病気になることもある。

そこで、西本さんが話してくれた「植物の気持ちを考える」ということが大切になっている。

西本さんは「植物は話さないけれど、気持ちを考えていけば『水がほしいんだろうな』ということがわかるようになり、適切に水をあげるようにしている」と話してくれた。

西本さんのように、植物の気持ちを考えて育てていくことができれば、植物も、植物を育てる人も幸せになれるのではないか。（藤本大貫、三原史寛）

すべての人の人権守るため意識改革を

すべての人の人権が尊重される、ということは大切だが、守っていくことは大変だ。私たちは、宝塚市人権男女共同参画課の池澤径子さん、横山純子さん、前家圭佑さんにインタビューした。宝塚市は、総合計画で「すべての人の人権が尊重され、平和の下で誰もがありのまま自分らしく生きている」まちを目指す、とうたっている。

性的マイノリティーの人への支援も、宝塚市の取り組みの特徴の一つだ。平成28年、日本で4番目の速さで「パートナーシップ宣誓制度」を導入した。また性別、性自認、性的指向による差別を監視する男女共同参画条例も制定している。

ほかに市内戦跡をめぐるバスツアーを、一般の人や子ども向けに開催するなど、平和についての特徴的な取り組みも行っている。

性的マイノリティーについては、特に「LGBTQ」という言葉がよく聞かれるようになった。人権男女共同参画課のみなさんは「社会的に、そういう問題のことを取り上げやすくなったのではないか」と話してくれた。

一方で、SNSが普及するにつれて、性的マイノリティーの人や、障碍のある人、外国籍の人などへの、心ない書き込みが見られるケースも起こっている。当事者の人たちの心を深く傷つけるような書き込みも見られるという。

具体的には、いろいろな人の人権を守っていくために、講演会を開いたり、ポスターを掲示したり、街頭啓発をしたりするなどさまざまな啓発活動を行い、市民に問題を知ってもらおうとしている。

たくさんの人がこうした問題を理解するには、「一人ひとりが意識を改革していくことが必要だ」と人権男女共同参画課のみなさんはいう。そこから、多くの人の理解も変わっていけばいいと思う。

（浅野昊希、足立遥香、芝莉紗子、湊理絵、吉田茜音）

パートナーシップ宣誓制度の受領証